■特集■連載〈視点〉を読んで

氷山の一角

清水あかね

昨年の三月号、四月号の「視点」を読み返した。ベテランから新進気鋭まで四人の短歌観が興味深かった。細溝洋子は「居心地の良い場所」(三月号)で「嬉しい」「寂しい」「美しい」が歌の言葉として不適切な理由を考えながら、「短歌というものは本質的に捻じれを愛する詩なのだ」と指摘した。佐佐木定綱は「光の世界」(三月号)で伊藤一彦の「われわれは何かの対象を観て歌を作る。問われているのは、対象を観ている自分自身である。」(『歌が照らす』)という言葉を引き、その難しさとそれを引き受ける覚悟を滲ませた。塩川郁子は「〈の〉のリズム」(四月号)で「何時よりかリズムのいい短歌が好きになっていた。三十一拍のひびきくる短歌にあこがれている。」と述べ、その理想像として「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲」(佐佐木信綱)をあげた。峰尾碧は「炭取が回る」(四月号)で一首の中に具体的な「物」を詠み込む重要性を指摘し、「本当の物が概念を一気呵成に現実化する歌」を理想とすると述べた。四氏の論から改めて良い歌とはどんな歌なのか、そもそも短歌とは何なのかを考えた。

私が作歌を再開したのは二〇一〇年の秋のことであったが、その頃の総合誌を見てちょっと驚いた。若い人の歌が詩的で内省的、そして技巧的になったな、と思った。大森静佳や藪内亮輔といった当時の大型新人に強い衝撃と刺激を受けた。

・どこか遠くでわたしを濡らしていた雨がこの世へ移りこの世を濡らす
『てのひらを燃やす』大森　静佳

・おまへもおまへも皆殺してやると思ふとき鳥居のやうな夕暮れが来る
『海蛇と珊瑚』藪内　亮輔

大森静佳の心にしみじみと沁みてくるようなやわらかな調べの、それでいてこの世ならぬ世界を陰影深く描く歌に心をふるわせた。また藪内亮輔の「鳥居のやうな夕暮れ」という大胆で鮮烈な比喩に、自分の堅い頭を打ち砕かれたような思いがした。

彼らの歌に眼がいったのは、私自身が以前作歌をしていたのが当時の彼らと同じ年代だったからだ。その頃(一九八〇年代後半)は『サラダ記念日』ブームの最中、直後でいわゆるライトヴァースからニューウェーブへ向かう時代であった。短歌人口の裾野が大きく広がり、短歌が急速に大衆化した時代でもあった。分かりやすさや軽い言い回しの歌が持てはやされ、今の歌評でよく使われる「詩的飛躍」はあまり求められなかったように思う。時代もバブルで陰影を好まなかった。こういう時期に数年作歌をして、その後長く休んでいた私に、二十年のブランクは大きかった。しかし、その変化には戸惑いよりもむしろ喜びの方が大きかった。もともとの志向もあったが、すでに四十代になっていた私には、今の大森らの瑞々しいが陰影に富む作品のほうが気持ちにしっくりと寄り添ってくれた。

しかし、今改めて『サラダ記念日』を読み返すと、リフレインや対句はもちろん枕